

# 盗まれた男性の傷たち

「盗まれた傷たち | Stolen Scars」

作者の森栄喜と、本作にも参加協力し、  
男性の性被害について

調査研究を行なっている宮崎浩一が、

人の痛みや傷つきについて語り合った往復書簡。

## プロフィール

### 宮崎浩一

立命館大学大学院人間科学研究科博士課程後期課程  
臨床心理士 公認心理師  
男性の性被害について調査研究を行っている。

### 森 栄喜

パーソンズ美術大学写真学科卒業  
本展で人の傷つきとケア、回復を主題にしたサウンド  
インスタレーションを発表。

宮崎さん

こんにちは。

あらためて「盗まれた傷たち | Stolen Scars」に参加してくれてありがとうございました！元々は別の作品の準備をしていた中で、宮崎さんの男性の性被害についての論文や執筆したものを読ませてもらい、宮崎さんの調査研究テーマが本作とも深くつながっていると感じたのが、今回参加をお願いしたきっかけでした。

“深く傷つき、心が痛み、まだ立ち直っていない少年がいます。あなたは声をかけることも、背中をさすってあげることができません。でもその代わりに、彼へ、ベルを鳴らすことができます”と記した短いメモとともに、それぞれ音階の違うハンドベルを友人たちに送りました。宮崎さんにも僕が宮崎さんを思い描きながら選んだ音色のハンドベルとメモを送って、そのメモだけを手がかりにベルを鳴らしてもらいましたよね。

実は当初、“傷ついた当時の自分自身や、まだ傷ついたままの現在の自分自身”へ向けてベルを鳴らしてもらおうと考えていましたが、どうしても傷と直接的に向き合わせることになるかもしれないと思い、“自分自身”という言葉で“少年”に書き換えました。それでも、宮崎さんをはじめ、友人たちから届いたさまざまに響き渡るベルの音色を聴くと、抽象的な架空の少年という存在を通していろんな思い出や記憶や感情、そしてきっとそれらの奥にある自分自身の傷とも、それぞれのやり方で向かい合ってくれたんだなと感じました。

宮崎さんもハンドベルを受け取ってから録音するまでの間、旅先に一緒に持って行ってくれたり、鳴らし方をいろいろ試してくれていたようですが、その過程で少年の存在やベルの鳴らし方など、宮崎さんの中でどのように変わっていききましたか？また、冒頭にも書きましたが、宮崎さんの調査研究と重なる部分が多いテーマでもあったと思います。その点で入り込みやすかったり難しいと感じたことなどはありましたか？

森さん

お便りをありがとうございます。

送っていただいたG#のベルを眺めながら書いています。

私は「盗まれた傷たち | Stolen Scars」とタイトルを聞いて、トラウマを連想しました。トラウマという言葉はもともと「身体の傷」という意味で、そこに精神的と付けられてから今のように心の傷を表す意味にもなりました。

実は、届いた箱を開けて、すこし戸惑ってしまいました。ベルの形に沿って縫い合わされた開け口のない一枚の布に、鳴らさなければならないベルが収まっていたからです。トラウマを手にする、向き合うプロ

セスだったのでしょうか。固く塞ぐ布と糸は傷を覆う瘡蓋<sup>かさぶた</sup>だと直感しました。糸を解こうとしましたが、全く手に負えずハサミを使って切り裂き、ベルとメモを取り出しました。

確かに、漠然とした「少年」へ鳴らす設定は自分自身の傷との直面ではなかったと思います。けれど、その一方で、傷そのものを生々しく感じもしました。というのも、「少年」には無垢性が感じられますし、その傷つきにはおそらくどのようにも対処できない、また、責任のない苦しみがあると思ったからです。そして、少年が成長し大人の男となったとき、その痛みは固く塞がれてしまうのだろうという哀しい気持ちもありました。

このように感じたのは、私が男性の性被害を研究しているからかもしれません。2017年に刑法が改正され、初めて男性が挿入を伴う性犯罪（強制性交等罪）の被害者となれることになりましたが、ここに端的に表れているように、男性の性被害は、長い間、無いものとされてきました。男性が性被害に遭うことは事実で、その痛みも男性だからといって小さくなるわけではないのに……。

男の子どもが男の子ですが、生まれた時から男か女として届け出られ、社会に生きざるを得ないジェンダー化された日本に生きている私たちは、痛みや傷についても、「男の」とあえて付けなければ、少年の傷も男性の傷も見ることができなかつたのかもしれない。

森さんはハンドベルを男性にだけ送ったのですか？もしそうだとすれば、なぜ男性の痛みや傷と向かい合おうと思われたのか聞いてみたいです。

ベルを取り出すまでで長文になってしまいました。箱を開けた時からアート作品の参加が始まっていたのだなと感じています。

宮崎さん

お返事ありがとうございます。

これを書き始める前にひと振り、Eのハンドベルを鳴らしてみました。エアコンの稼働音や外の雨音が一気に追いやられつつも、鐘音の響きが弱くなるにしたがって静かに戻ってきて、まるで音の波打際に立っているような気持ちになりました。

送り主がこんなこと言うのも変ですが(笑)ベルを縫い包んだ布袋が届いたら、僕も確実に戸惑ってしまおうと思いました。縫い合わさっている生地をハサミやカッターなどの刃物で切り裂くのは、どうしても躊躇<sup>ちゅう</sup>してしまいますし…。でも敢えて布袋を切り裂いてベルを取り出してもらおうことで、楽器(=身体や傷)を包み込み、覆い隠しているものを取り去るように、ある意味、無防備でまっさらな気持ちでハンドベルを手にしてもらえるかなと思いました。僕もそうですが多くの人にとって自分自身の痛みや傷について、あらためて思いを寄せたり向き合うことって普段なかなかできてないことだと思います。

男性の傷は、傷つくことすらあらかじめ許されていないような「男らしさ」に縛られた社会の中で、とても見えづらくなっていて、傷ついた本人ですらその痛みや傷をすぐになかったことのように葬ろうとしているように感じます。それは社会の中で自分を守るためだったり、生きやすくするためでもあると思うのですが、受けた傷を何のケアもなく剥き出しのまま、心の奥に閉じ込めてしまっていると化膿したり深くなってしまうこともあるんじゃないか…。そんなことも思いながら男性の友人たちにハンドベルを送りました。(ちなみに彼らのパートナーや子供も急速参加してくれてベルを鳴らしています)

本作「盗まれた傷たち | Stolen Scars」のインスタレーションでは、宮崎さんを含め、ひとりひとりが心を込めて奏でくれた鐘音が、展示空間全体に響き渡りつつも、使用するスピーカーの特性上、鑑賞者のひとりひとりの耳にまっすぐに届きます。美術館という公共の場で、言葉や声とはまた違う響きや届き方をする鐘音だからこそ可能な、痛みや傷についてのあらたな対話が始まるといいなと思っています。

前回、宮崎さんも書かれているように「男らしさ」の規範が強い社会では、特に男性の性被害は見えづらくなっていて、被害者自身もきっと混乱したり自己嫌悪になったり、相談するのを躊躇ってしまうかもしれない。男性の性被害についての情報や知識がなくて、そもそも自分に起きたことがわからなかったり、誰かに打ち明ける、相談するという発想自体もできないかもしれない…。男性の性被害やそのケアの現状について少し詳しく聞いてみたいです。あと、性暴力を受けたことを家族や友人知人などから打ち明けられたり相談された時は、どのように話を聞いてあげればいいですか？

森さん

お返事をどうもありがとうございます。

森さんが鳴らしたのは、ミの音ですね。僕のは、ソのシャープ。一緒に鳴らすとどんな音が聞こえてくるのでしょうか。

ベルを取り出すプロセスも作品の一部として音に表れるようにデザインされていたのですね。手当されていない男の傷つきも思いながら男性の友人たちへベルを送ったとのこと、なかなか凄い贈り物だと思いました。「傷つくことすらあらかじめ許されていないような」社会とは、残酷です。誰かに傷つくな！と言われても傷つきますよね。どんなに鍛えても、切られたら血は出るし、痛い。当然の痛みが認められないのは、残酷な社会です。

私が躊躇いながらも取り出したのは黒い取手がついた銅色のベルでした。「少年」へベルを鳴らした時に感じたのは、決して届きようがないという諦めの気持ちと、それでも音の波は空間を揺らして、手は届かない所へも伝わるのではないかという淡い願いでした。そして、届いて欲しいのは、「あなたは悪くない」というメッセージでした。

森さんが書いていたように、男性の性被害というのは、長らく見えない問題で、様々な困難があります。その難しさの一つに、「男らしさ」と「性被害」が矛盾していることを挙げられると思います。男らしさは、弱さや傷つきを排除したところに成立しています。性的に能動的で挿入する側とされる男性は、ある種「男らしく」加害者になれることになっています。一方で、性的な被害に遭うことは「男らしく」ないことになっています。そして、ここで想定されているのは、異性間の性交です。ですので、同性間の被害はホモフォビアな扱いを受けるおそれがありますし、女性の加害者のことは想像され難いことです。結果として、男性の性被害は信じてもらえない事柄となります。

強調しておきたいのですが、男性の性被害が見えづらい事で得をしているのは、加害者と男性優位な社会（つまり、性差別のある社会）を温存したい人たちです。男性の被害を無いものとしておけば、「男らしさ」の規範を延命し、性差別に加担できる男性が優位に続けられるからです。もちろん、加害者にとっては、その行為の責任が問われることすらないのですから、大いに得ですね。

実際には、女性からの加害もありますし、男性が挿入される被害に遭うこともあります。内閣府が行った調査では、男性で「無理やりに性交等をされた経験」1%という数字がありますし、なんらかの性被害は20～30%ほどあると言われています。また、勃起や射精が起きるようにする加害行為も珍しくありません。勃起や射精は反射的な反応なので、不快で望まない状況であるにも関わらず、刺激を受ければ起きうることです。

このように、実際に被害は起きていますし、性被害による影響についても、男性だからといって小さいことは無いと分かっています。

男性の性被害が表に出てきづらい状況とは、つまり、当事者が話し難いということです。もし誰かに打ち明けられたら、まずは、信じて聞くことが必要だと思います。

「信じて聞く」ことは、男性の被害を無いことにしておきたい側が最もされたくないことだと思います。なぜならそれによって、傷ついた人の声が隠される社会の歪みが露呈していくからです。

音が中心の今回の作品ですが、聞いてしまったら応答したくなります。響き渡りながら、鑑賞者の耳にまっすぐ届く音を聞いた（もしくは、聞いてしまった？）事で、対話に招かれていくのでしょうか。

宮崎さん

お返事ありがとうございます。

宮崎さんからのお便りを読んで、男性の性被害についての調査研究による具体的な事実や数値を知ると、家族や親しい友人知人を含め、本当に誰にでも起こり得ることなんだと、あらためて切実に感じました。

昨年はNHKのクローズアップ現代プラスでの特集「あなたはひとりじゃない～性被害に遭った男性たち～」が放送されたり、宮崎さんも寄稿された「わたしは黙らない 性暴力をなくす30の視点」（合同出版編集部編、合同出版）などのいくつかの書籍の出版もあり、少しずつですが男性の性被害についての情報が得やすくなり、語り合う機会も増えてきていると感じます。今後さらに男性の性被害者の声を「信じて聞く」ことができる社会を作っていくには、どうしたらいいのか。

先のクローズアップ現代プラスでのアンケート結果からも、その深刻さが浮き彫りになったのが子供の頃の被害の多さだと思います。宮崎さんも最初のお便りで「少年」の傷つきについて話してくれました。

幼ければ幼いほど子供自身が性被害に遭ったんだと認識することの難しさや、もし認識できても大人や社会に伝える過程には様々な大きな困難があります。認識できるのが大人になってからかもしれないです。あらためて宮崎さんに子供の性被害をめぐる現状について聞いてみたいです。また、被害を認識してない時期と認識後では傷の影響はどのように変わるのでしょうか？

今回、宮崎さんと友人たちに送ったハンドベルは、繊細な音色を出したくてもなかなか思い通りに鳴らせない、とても簡易な作りのベルです。それでもみんな思いを込めて鳴らしてくれていて、語りかけてくるような体温のある鐘色が集まりました。ハンドベルって、くじ引きなどの大当たりの時もよく使われてますが(笑)、婚礼や葬儀などの人生の節目節目で使われたり、日本では除夜の鐘、ヨーロッパでは教会の鐘音が聞こえる範囲を村の境界線としていた歴史があったりと、ずっと昔から人の暮らしに深く根付いてきた音だと思えます。

実は昨年まで大きな教会の近くに住んでいました。かなり遠くからでも見える高さの立派な鐘塔もあったのに、とうとう一度も鐘音を聞かないまま引越してしまいました。苦情があっても鳴らさなくなりましたみたいで。幼稚園や公園の子供の声が騒音問題になったりもしていますよね。誰かにとっては音楽のように楽しくて心地よく癒しにもなる音でも、誰かにとっては単に耳障りな騒音になる。性被害についても“これぐらい大したことじゃないだろう”と思っても、相手にとっては深く傷つき大きなトラウマになることかもしれない。男性優位の社会の中で女性はもちろん、男性自身の弱さや痛みから生まれる鳴咽も、ただの騒音のように無視されたりかき消されてしまっていたり…。

こんなことを思いながら、今日も宮崎さん、そして友人たちから届いた鐘音とともに作品を作っています。かけがえのない、あたたかい「騒音」が降り注ぐ空間を、たくさんの人に体感してほしいなと思っています。

森さん

お便りをありがとうございます。

会期が近づきお忙しくされていることと思います。

森さんが書かれていた、「あたたかい『騒音』」という言葉に様々なことを思いました。私の研究は被害者支援につなげるためでもあるし、広く社会に問題を知ってもらうためでもあります。無いことになってきた男性の性被害という問題を社会に訴えることは、ノイズを起こすということかもしれません。これまで聞いたことがないような音だから、注意を引くこともあるし、取るに足らないと流されることもあります。でも、聞いてしまったことは事実だから、多かれ少なかれ影響が残るはずだと信じています。

お尋ねのあった子どもの性被害はとても深刻な問題です。現状の課題は様々ありますが、現実子どもが被害に遭っていることをまずは示しておきたいと思いました。

性暴力の中で性犯罪となるのは一部です。全てが事件化されるわけでもないですが、例えば、警察庁のデータを見ると2020年の強制性交等と強制わいせつの被害者の内、約4割は未成年者となっています。森さんも書かれていたNHKが昨年行ったweb調査では、292人の男性被害者が回答し、被害に遭った時の年齢が未成年なのは5割を超えていましたし、被害を「どこ(だれ)にも相談しなかった」のがもっとも多く、194名という結果でした。

男の子の性被害の課題の一つとして、周りの大人が気づきにくいという事を挙げられると思います。男の子が被害に遭うという基本的な事実がまだ一般的ではないことで想像が及ばないこともありますし、大人の体に近づき性的に成熟してくる思春期からは、成人男性の延長として見えてしまい、余計気づきにくくなるようです。例えば、14歳の男子が成人と性行為があったことは、14歳の女子が成人と性行為があったことよりも、どこか問題の重さが異なるように感じられてしまうのではないのでしょうか。

「騒音」で連想したのが、被害者非難の声です。被害を受けた人の言動だとか、落ち度をあげつらう、「男は被害に遭わない」「男同士でよくあるよ」「ちょっとした冗談じゃない?」「セックスできてラッキーじゃん」「なんで逃げなかったの?」などなど…の声です。加害がなければ被害はないという、当然のことをあえて言わなければならないほど、まるで加害者などいなかったかのように、そして、被害などなかったかのように、冷酷な騒音が今もまだ鳴っています。

「少年」を想い鳴らされたいくつものベルの音が、傷ついた心に届きますように。

「盗まれた傷たち | Stolen Scars」を体感するのが待ち遠しいです。

#### 参考文献

- 〔往復書簡4回目〕  
内閣府男女共同参画局・男女間における暴力に関する調査報告書(令和2年度調査)  
Retrieved from [https://www.gender.go.jp/policy/no\\_violence/e-view/choose/pdf/02/02sanjikan12.pdf](https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-view/choose/pdf/02/02sanjikan12.pdf) (2021年11月閲覧)
- 〔往復書簡5回目〕  
合同出版編集部(2021)．わたしは黙らない…性暴力をなくす30の視点 合同出版
- 〔往復書簡5回目と6回目〕  
クロスステアアップ現代プラス(2021)．男性の性被害 292人実態調査アンケート結果 (Vol.1) Retrieved from <https://www.nhk.or.jp/gendai/comment/0206/020613.html> (2021年11月閲覧)
- 〔往復書簡6回目〕  
警察庁・犯罪統計資料(令和2年1～12月【雑報】)  
Retrieved from <https://www.stat.go.jp/stat/search/lie?page=1&you=detail&table=00130011&stat=000001149167&cycle=0&year=2020&month=0> (2021年11月閲覧)



展覧会情報は  
こちらから

高松市美術館  
TAKAMATSU ART MUSEUM